

『ズートピア』論

～アイデンティティ・ポリティクスとコミュニケーションスタイルから～

3年3組20番 利根川茜

I はじめに（アブストラクト）

ウォルト・ディズニー・アニメーション・スタジオによる『ズートピア (zootopia)』は2016年2月7日に初公開されたコメディ・アドベンチャー映画である。肉食動物と草食動物が共に暮らす大都市「ズートピア」を舞台に、新米警察官であるウサギのジュディ・ホップスと、詐欺師であるキツネのニック・ワイルドがバディを組んで、動物たちの連続行方不明事件を解決していくという物語だ。連続行方不明事件を解決する中で変わってゆく2人の関係を軸に、その中であぶり出される“差別”や“偏見”といった大都市の社会問題を描いている。そこで、この物語を読み深めるために、草食動物であるジュディと肉食動物であるニックのコミュニケーションに注目することで、彼らはどのようにして“差別”や“偏見”を乗り越えたのかを考察した。

本論文では『ズートピア』を論じていくにあたり、以下の手順に沿っていきたい。まず、物語のあらすじや登場人物について述べ（II）、アイデンティティ・ポリティクスによるニックの変化を取り上げ（III）、ジュディとニックのコミュニケーションスタイルを加賀美常美代の「葛藤解決方略の次元モデル」から考察する（IV）。最後に、アイデンティティ・ポリティクスと、ジュディとニックのコミュニケーションスタイルの変遷から、この作品を分析する（V）。

II あらすじと登場人物

物語の舞台である「ズートピア」は、「Zoo（動物園）」と「Utopia（理想郷）」を合わせた造語である。そこは草食動物と肉食動物が分け隔てなく暮らす都市で、動物ごとに体の大きさや特徴に合わせたバリアフリー化が進んでおり、この点では多様性に富んだ、まさに理想郷とも言える場所だ。主人公ジュディは、幼い頃からの警察官になりたいという夢を叶えるためにズートピアへと踏み出し、偶然にも出会った詐欺師のニックとバディを組んで事件の捜査を進めることになる。しかし、実際の「ズートピア」はそんな楽園とは程遠く、2人は事件を解決していく過程でこの街の根底にある“差別”や“偏見”に直面する。そもそも「ズートピア」はアメリカ社会を暗示している。劇中でニックがアイスキャンディーを買うのを断られていたことは、黒人の入店を断る店のメタファーであり、ニックがキツネだからという理由で「ずる賢い詐欺師」「信用できない」という偏見を持たれているのも「黒人は犯罪率が高い」という偏見の象徴である。肉食動物が1割しか住んでいない設定について、実際のアメリカ内における黒人の人種別の人口率は約12%とほぼ一致し、肉食動物への悪いイメージと黒人へのイメージは類似している。マジョリティの立場であるジュディと、マイノリティの立場かつ「キツネ=ずるい動物」というレッテルを貼られたニックは、はじめは意見が食い違い、衝突することばかりである。しかしコミュニケーションを通じて、ジュディは、ニックのネガティブな偏見をポジティブなものへと変化させ、最終的にニックはマジョリティと共に社会で活躍していく。

本稿では、マイノリティの立場で社会から排除されてきた詐欺師のニックが、新米警察官のジュディと出会い変化していく過程と、彼らが共に差別や偏見を乗り越えていく姿を、アイデンティティ・ポリティクスとコミュニケーションスタイルから考察していく。

III アイデンティティ・ポリティクス

草食動物というマジョリティの立場であるジュディとの関わりを通して、肉食動物というマイノリティの立場であるニックはどのように変化したのだろうか。

『ズートピア』において、ジュディとニックが関わるきっかけは、肉食動物連続行方不明事件にある。警察官になったジュディは羊の副市長ベルヴェザーに後押しされ、肉食動物連続行方不

明事件の捜査に携わることになる。捜査にあたり、監視カメラ映像から、失踪したカワウソのオッタートン氏が持っていたアイスキャンディーは詐欺師のニックが売っていたものだと気付く。その後、彼女はニックにこの話を持ちかけ、嫌々捜査に引きずり出すことに成功するのだ。ジュディとニックが共に捜査を進めていく上で、ニックは、マイノリティの存在である肉食動物かつ、「きつね=ずるい動物」というレッテルを貼られていることで社会から差別や偏見を受け、悩まされていくことになる。そこで、差別や偏見を乗り越えるためにジュディが行ったのがアイデンティティ・ポリティクスであると考えられる。したがって、ジュディがニックに対して行ったアイデンティティ・ポリティクスを通して、この物語を考察していく。塩原良和はアイデンティティ・ポリティクスについて、以下のように述べている。

自らの内面にある差異を否定することは、自分自身を否定することだ。そうであるならば、人がマイノリティの立場から解放されるためには、自己を束縛する差異から逃げるのではなく、社会が自分の持つ差異に与えている価値を、ネガティブな価値からポジティブな価値へと変えていくほうがよい。こうした戦略はアイデンティティ・ポリティクスと呼ばれる。¹

つまり、アイデンティティ・ポリティクスとはマイノリティの人が自らの差異に与えられたネガティブな価値をポジティブな価値に変えていく挑戦であるといえる。この挑戦により、マイノリティの人々は自身が持つネガティブな差異を長所に変え、自己を否定することなく、それをアイデンティティの根本をなすものとして社会に承認させることが可能になるのだ。

(1) アイデンティティ・ポリティクスを行うきっかけ

塩原良和はアイデンティティ・ポリティクスに伴うアクションの第一歩について、「マジョリティ優位につくられた社会の支配的な価値観に対するマイノリティの異議申し立てである」と述べている。これは、『ズートピア』においてマイノリティの立場であるニックと彼を助けたいジュディが、ニックにネガティブな偏見を持つ草食動物に対して、異議申し立てをしたことに当てはまる。肉食動物連続失踪事件の捜査に乗り出したジュディとニックは、捜査中、失踪したカワウソのオッタートン氏とジャガーの居場所を突き止め、彼らが凶暴化しているのを目の当たりにする。そのことを水牛の警察署長ボゴに報告するも、「きつねのことを信用すると思うか？」³と言われ、それに対して「でも、重要な目撃証人です。ニックが協力してくれたんです。」(p.143)とジュディは反発する。正義感の強いジュディは、社会がマイノリティに対して持つ偏見に違和感を持ち、抗議をしたのだ。その後、2人が捜査地からゴンドラでズートピアに戻る場面では、ニックが「きつねは信用できない、ずるい動物。世間からそんなふう決めつけられているとしたら、きつねがどうがんばっても意味がないってことさ。」(p.148)と弱音をこぼす。それに対してジュディは「ニック、あなたは、ずるいだけのきつねじゃないわ。」(p.148)と優しく彼を励ます。

ここから、ジュディがニックの差異を認め、助けたいという気持ちが強く読み取れる。きつねであるがために、社会から信用されないニックの姿を見て、ジュディが社会に異議申し立てをしたのだ。このことが、ジュディとニックがアイデンティティ・ポリティクスを行う原点になったといえる。

(2) アイデンティティ・ポリティクスによるニックの変化

アイデンティティ・ポリティクス、つまりジュディがニックのネガティブな差異をポジティブなものに変えることによってニックはどのように変化したのか。きつねなんて社会に認められなくてもしょうがない、と諦めている彼の変化を追っていく。

¹ 塩原良和 (2012) 『共に生きる』 弘文堂、p.59

² 塩原良和 (2014) 「マイノリティとポジショナリティ」 大澤真幸・橋本努・和田伸一郎編 『ナショナリズムとグローバリズム』 新曜社、p.276

³ スーザン・フランシス作 橘高弓枝訳 (2016) 『ズートピア』 (偕成社p.143) 以降、本論における引用は本書を底本とする。

分析するにあたり、ニックが社会から偏見を持たれ、悩まされていくことになる「きつね=ずるい動物」という差異に注目する。作中、「ずるい」、「ずる賢い」という言葉が出てくるが、これらの使い方の変化を追い、アイデンティティ・ポリティクスがどのように進んでいくのかを分析する。また、正確な言葉のニュアンスを知るために、翻訳された日本語と共に原作の英語を用いて考える。原作と訳書を照らし合わせると「ずるい」は「shifty」、「ずる賢い」は「sly」という言葉が使われていた。そこで、これらの単語がポジティブ、またはネガティブなニュアンスを持つのかを正確に判断するためにCOCA -English- Corpora⁴を用いる。使い方として、これらの単語と共に使われることの多い単語からニュアンスを判断する。

まず、shiftyと最も多く一緒に使われている単語は、geezerであった。geezerとは「変人、風変わりな人」という意味である。他に、主に併用される語として、guilt「罪悪感」、shady「怪しい」という英単語が挙げられ、暗い印象を持つ。一方、slyと最も多く一緒に使われている単語は、smile「笑顔」であった。他にも、humor「ユーモア、おかしさ」やgrin「歯を見せて笑う」という単語が挙げられ、これらの単語には明るい印象を持つ。このことを踏まえ、分析を行っていく。

ジュディとニックが捜査地からゴンドラでズートピアに戻る場面にて、ニックが「きつねは信用できない、ずるい動物。世間からそんなふう決めつけられているとしたら、きつねがどうがんなばっても意味がないってことさ。」(p.148)と弱音をこぼす。この台詞は原作にて“*If the world's only gonna see a fox as shifty and untrustworthy, there's no point in trying to be anything else.*”という台詞である。「ずるい」という言葉は「shifty」が使われており、ニックのネガティブな気持ちが読み取れる。それに対してジュディは「ニック、あなたは、ずるいだけのきつねじゃないわ。」(p.148)と優しく彼を励ます。次に、ジュディとニックが捜査を終えてズートピアに帰る際、ニックは、ジャガーやオッタートン氏の身に何が起こったか知る手がかりとして、交通監視カメラを見ればいいと閃く。この場面にて、ジュディは「ずるがしこいわね。さすがだわ。」(p.149)と言い、原作では“*Pretty sneaky, Slick.*”という台詞である。ここでは「ずる賢い」に「sneaky」が使われている。COCA -English- Corpora⁵によると、共に使われるのが多い単語としてbastard「いやなやつ」やunderhand「秘密[不正]の」というネガティブな単語がある一方、manipulative「巧みに扱う」やsmart「頭のいい」というポジティブな単語も挙げられた。したがって、shiftyというネガティブな言葉にポジティブな意味を付け加えて言い換えることで、彼の鋭さを称賛したのである。また、監視カメラから手がかりを得られた時には「すごいわね。あなたはきっと有能な警官になれるわ。」(p.156)とニックを褒め称える。さらに、事件の犯人であったベルヴェザーを捕まえ、犯行を白状させたときには「ちょっとずるいやり方、これをべてんという！」(p.210)と2人は声を合わせて喜びを分かち合う。この発言は、ジュディが詐欺師であったニックを認め、今では彼のずる賢い性格が事件に役立ったことを社会に証明できた、という大きな自信なのではないだろうか。最後に、お互いに「ずる賢いうさぎだ。」「あなたは、まぬけなきつね。」(p.215)と言って笑い合う場面がある。この台詞は原作では“*Sly bunny.Dumb fox.*”であり、「ずる賢い」という単語が「sly」になっている。ニックが悩まされてきた偏見は、「shifty」から「sneaky」へと変化し、最終的には「sly」となって、ネガティブなものからポジティブなものへと変化したのだ。

以上のことから、ただずるい動物だと言われていたニックに対してジュディは、賢いというポジティブな価値を付与し、そのずる賢さが警官に必要な能力だとして、彼を励ましたのだ。ジュディに何度も鼓舞されたニックは、さらに捜査に意欲的になり、2人は事件解決まで辿り着くことができる。最終的にニックは、ジュディと共に難事件を解決した功績を讃えられ、警察官として認められるのだ。マイノリティの立場であるニックが、マジョリティと共に活躍できるように

⁴ 「COCA -English- Corpora」
<https://www.english-corpora.org/coca/>
2022年10月2日閲覧

⁵ 「COCA -English- Corpora」
<https://www.english-corpora.org/coca/>
2022年10月2日閲覧

なったのは、ジュディが行ったアイデンティティ・ポリティクスが大きく起因していると考えられる。塩原良和はアイデンティティ・ポリティクスのメリットとして以下を述べている。

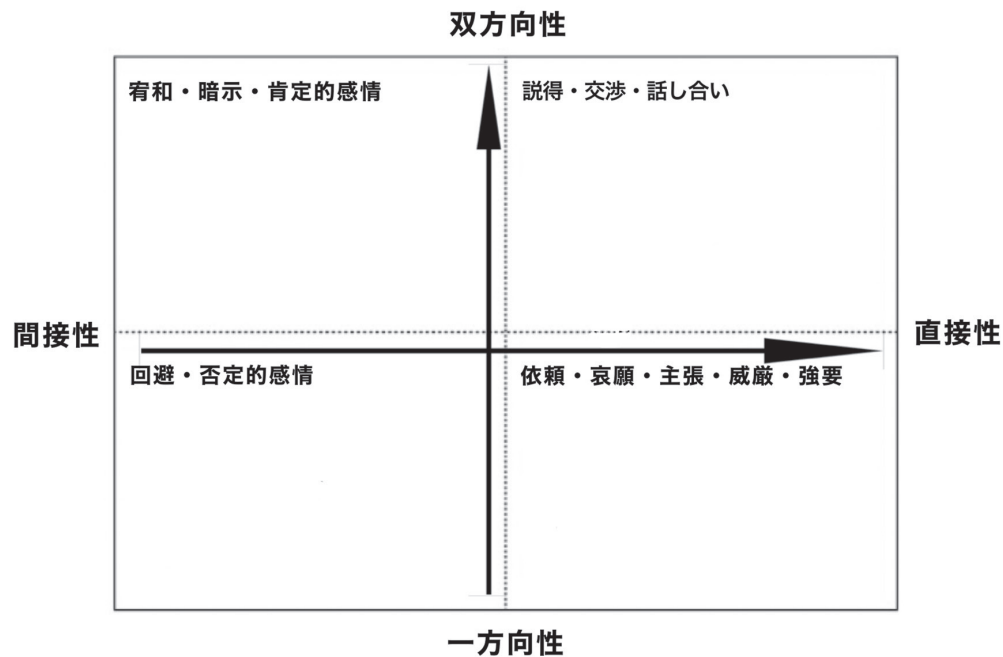
マイノリティが自分たちの文化やアイデンティティの価値をポジティブに解釈しなおすことは、社会に参入してマジョリティと対等な立場で競争していくための資源としてそれらを活用可能にすることなのである。⁶

その通り、ジュディがニックの「ずるい動物」というネガティブな差異に、警察官に適した鋭い考えを持つ「ずる賢い」というポジティブな価値を付与したことで、最終的にニックは警察官として社会に認められ、マジョリティと対等な立場で活躍していく。この変化から、ジュディがニックに対して行ったアイデンティティ・ポリティクスは大いに成功したといえる。

IV 葛藤解決方略の次元モデル

加賀美常美代の葛藤解決方略の次元モデルにおいて、ジュディとニックのコミュニケーションスタイルの変遷と、それに伴う2人の関係性の推移からどのようなことがいえるだろうか。マジョリティの立場であるジュディと、マイノリティの立場であるニックは何度もすれ違いを経験する。そのような壁にぶつかったときの彼らのコミュニケーションの取り方について、図1の葛藤解決方略の次元モデルを使って考えていく。

図1 葛藤解決方略の次元モデル



出典) 加賀美常美代 (2013) 『多文化共生論』

加賀美常美代は図1について以下のように説明している。

直接性の次元では、間接方略、直接方略があるが、自分の願望をどのくらい相手に直接的に伝えるか、ほのめかすか、全く伝えないかという次元である。双方向性の次元は、相手の立場や気持ちを配慮する程度を表す次元であり、一方向方略、双方向方略がある。前者は自分の要求や感情を押し付けるが、後者は相手の気持ちを考えながら、自分が相手の感情を自発的に変えるように促すものである。これらの次元から、直接・双方向方略（説得、交渉な

⁶ 2に同じ p.277

ど)、間接・双方向方略(宥和、暗示など)、直接・一方向方略(依頼、強要など)、間接・一方向方略(撤退、回避、無視、怒りなど)の4タイプに分類できる⁷。

直接性と間接性、双方向性と一方向性の観点から考えると、コミュニケーションスタイルは大まかに4タイプに分類される。自分の願望を伝えず、相手のことを考えなければ、間接・一方向方略となり、うまくコミュニケーションをとることができない。しかし、自分の願望を相手に面と向かって伝え、相手の立場に立って発言することで直接・双方向方略となり、上手にコミュニケーションをとることが可能になる。つまり、この表において、コミュニケーションスタイルが右上にいけばいくほど良いということだ。

作中から8つの場面を順に取り上げ、彼らのコミュニケーションスタイルを分類し、どのように変化しているのか分析する。(①～⑧)

①ジュディがズートピアに旅立つ際に、父親に「やつはペテン師だぞ。ズートピアにはイタチがごまんという。ペテン師の代表といえばきつねだがな。いちばん、たちが悪い。」(p.37,45)とジュディにきつねよけのスプレー缶を持たせる。ジュディは意地悪なうさぎだっていると公正な態度を取るが、実際にズートピアに着き、出かける際にはきつねよけを常備している。

②ジャンボウズ・カフェにて、ニックがきつねだからという理由でアイスの販売を断られる。そこに出くわしたジュディはニックにアイス奢り、「きつねに対する時代遅れの偏見にはいきどおりを感じるの。」(p.60,61)と言って励ます。

③悪い手口で棒つきアイス売るニックを見つけたジュディは、「ペテン師ニック!逮捕するわ!」(p.68)と言い、それに対してニックは「おれは、こずるいきつね、そしておまえは、まぬけなうさぎだ。」(p.70)とジュディのことを馬鹿にする。

④行方不明のオッタートン氏の手掛かりを知っているニックを捜査に無理矢理引きずり出し、証拠を掴む旅に出る際、ニックは「かわいいうさちゃんには、むかない場所だ」(p.98)とからかい、ジュディは「“かわいい”なんていわないで。」(p.98)と答える。最後にニックは「わかったよ。おまえがボスだ。」(p.98)と言った。

⑤捜査中に、ジュディとニックは凶暴化したジャガーに襲われ、それを水牛のボゴ署長に訴えるが「きつねの言うことを信用すると思うか?」(p.143)と冷たくあしらわれてしまう。「きつね=ずるい動物」という偏見を身をもって痛感したニックは、強いショックを受ける。帰りのゴンドラの中で、彼はジュディに過去のいじめや本音をカミングアウトし、初めてジュディに弱みを見せた。ジュディは「ニック、あなたは、ずるいだけのきつねじゃないわ。」(p.148)と優しく寄り添い、また、ニックのネガティブな差異にポジティブな価値を付与して何度も励ますことで、彼の背中を押していく。

⑥行方不明事件が解決し、それと共に露見した肉食動物の凶暴化について、捜査に向けて活躍したジュディはマスコミ取材を受けることになった。ジュディは事件について分かることを、凶暴化するのには肉食動物だけと述べ、「生物学上の構成要素、つまり、DNAです。」(p.170,171)と不適切な回答をしてしまう。生物学上の構成要素に触れたり、肉食動物の残酷な本能が蘇ったのかもしれないという内容に怒ったニックは「最初からわかってたさ。本気でおれを信用するやつなんていない。」「肉食動物は、パートナーとしてふさわしくないと思うぜ。」(p.175)と吐き捨て、その場から立ち去ってしまった。

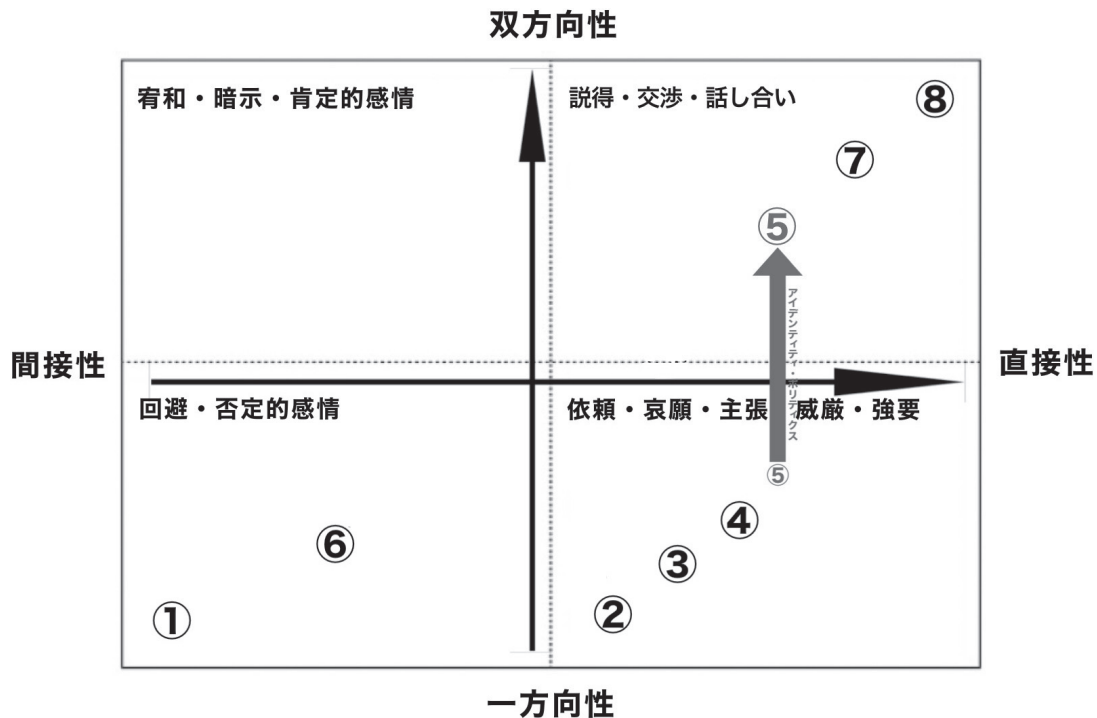
⑦ニックと喧嘩した後、頭を冷やすために故郷に帰ったジュディは、旧友との会話からヒントを得て、肉食動物が凶暴化するのにはある植物が原因ではないかと閃く。そして、すぐさまニックの元へ駆けつけ、「わたしは無知で無責任で、とても心がせまかった。でも、わたしのあやまちのせいで、罪のない肉食動物が苦しむなんて、たえられない。」(p.189)と謝罪する。ニックは不可解な謎を解くために、またジュディを手伝うことを決意する。

⑧事件解決後、ニックは正式に警察官として認められる。そして彼らは「悪がしこいうさぎだ。」「あなたは、まぬけなきつね。」(p.215)と笑い合った。

⁷ 加賀美常美代(2013)『多文化共生論』明石書店、p.15

(1) ⑥を除いた、①から⑧の場面において、ジュディとニックのコミュニケーションスタイルはどのように変化していくのか。

①から⑧を葛藤解決方略の次元に配置してみると以下ようになる。



①はジュディと彼女の父親が一方的にきつねのことを恐れ、否定的に捉えているので、間接・一方方向性が強い。②はジュディとニックが直接話をするが、2人は初対面であり、ニックはジュディに偽りの姿を演じていることから一方方向性が強い。③は、お互いに意見をぶつけ合っていることから直接性が強い一方、会話はニックがジュディを馬鹿にする内容であるため双方向性には欠けている。④はジュディの捜査にニックが協力すると合意した点で、少しずつ双方向性が強くなる。それは、ジュディがニックを捜査に連れ出すために何度もコミュニケーションをとりに行ったことで、彼の中に妥協が生まれたからだ。それに続き⑤はジュディが行ったアイデンティティ・ポリティクスがきっかけとなり2人の関係はぐっと深まる。ボゴ署長との対話で、ニックの「きつね=ずるい動物」というネガティブな差異がより一層彼を傷つけることになってしまう。

しかし、その後ニックは過去や本音を告白し、ジュディが彼の辛い過去に寄り添って励ますことで、2人の間に信頼関係が生まれた。また、それを糸口として、ジュディがニックの社会から持たれる偏見をポジティブなものに変えていくことで、直接・双方向性が強まっていった。⑦では、ジュディが勇気を持ってニックの元へ謝りに行くことで、間接性から直接性へと変化し、さらに本音で話し合うことで双方向性が強まっている。最後の⑧では、彼らは大切な相棒としてパディを組み、差別や偏見を乗り越えて、互いに認め合う存在となった。

加賀美常美代はコミュニケーションを円滑に行い、良い関係を築くためには、「両者の話し合いのもとでの共同活動や妥協などの直接・双方向方略に向かう必要がある⁸」と述べている。ジュディとニックは常に自分の意見を主張しつつ、相手の意見を受け入れながら、事件解決に向けて捜査に取り組んでいた。初めは衝突することもあったが、ニックはジュディの要求に妥協をしながら彼女を助けた。また、上の図から分かるように、2人のコミュニケーション・スタイルは直接・双方向方略へと向かっている。何度も捜査の手伝いを要求するジュディの積極的な行動がニックの心を動かし、さらに、彼の過去や本音のカミングアウトが、ジュディがアイデンティティ・ポリティクスを行う糸口となって彼らは良い関係を築いていったのだ。

⁸ 16に同じ p.17

(2) 葛藤解決方略の次元モデルから見る、コミュニケーションにおける落とし穴を⑥の場面から考える。

①から⑤の場面まで順調に仲を深める2人だが、差別や偏見の壁に直面する。⑥の場面では、マスコミ取材でのジュディの失言により、ニックがジュディの元から離れてしまったため、間接性が強まった。互いに相手から逃げる状況に陥ったことで、うまくコミュニケーションが取れず、2人の関係は悪化してしまった。加賀美常美代は、相手と分離や回避の状態、つまり間接・一方向方略の状態が進むと「お互いの接点がなくなり、否定的認識を生む悪循環となる」⁹と述べている。ニックが「最初からわかっていたさ。本気で俺を信用するやつなんていない。」「肉食動物は、パートナーとしてふさわしくないと思うぜ。」(p.175)と言い、その場から立ち去った行為は撤去、無視、怒りであり、間接・一方向方略である。また、自分の過ちを責め、警察バッチを外して故郷へ帰ったジュディの行為は、撤去、逃避であり、これもまた間接・一方向方略である。このように、お互いが何らかの理由で分離をし、相手と対話することを避けると2人の関係は自ずと悪い方向に進んでしまうのだ。これが葛藤解決方略の次元モデルから分かるコミュニケーションの落とし穴である。

このような失敗もあったが、ジュディが自分からニックに対話を持ちかけたことで、2人の関係は修復していった。彼らの出会いから相棒として2人が警察官になるまでを葛藤解決方略に配置してみると、2人のコミュニケーション・スタイルは間接・一方向方略から、アイデンティティ・ポリティクスを経験し、紆余曲折しながら直接・双方向方略へと変化していると分かる。彼らは差別や偏見に直面するものの、話し合うことをやめず、本音でぶつかり合うことで互いを理解して認めていったのだ。2人のコミュニケーション・スタイルの推移より、彼らは差別や偏見を乗り越えて、本当の友情を築くことができたといえる。

V アイデンティティ・ポリティクスとコミュニケーション・スタイルから

映画「ズートピア」で、草食動物というマジョリティの立場であるジュディと肉食動物というマイノリティの立場であるニックは、アイデンティティ・ポリティクスを通して、自らを否定することなく社会に認めさせることができた。さらに、価値観も考え方も違う相手と紆余曲折しながらも直接・双方向方略のコミュニケーション・スタイルを実現することで、差別や偏見の壁を乗り越えてゆく。アイデンティティ・ポリティクスでは、ネガティブな差異にポジティブな価値を付与することで、自らのアイデンティティを壊すことなく、自分らしく生きることができた。またコミュニケーション・スタイルは、話し合いをやめることなく、時には本音でぶつかり合い、お互いを少しずつ理解していく形が良い関係を築く鍵となった。そして、この2つが相互に影響し合うことで、彼らは強い絆を紡いだのだ。

ズートピアにおいて、草食動物はマイノリティの存在であり、肉食動物はマジョリティの存在である。一見強者と思われがちな肉食動物をマイノリティに設定しているのはなぜだろうか。

ジュディのことを小さい頃からいじめていたきつねのギデオンは、今では平和主義のパテシエになっている。また、動きがとて遅いナマケモノのフラッシュはドラッグレーサーであった。小さなうさぎのジュディが他の警察官を凌いで難事件を解決し、ずる賢いきつねのニックは最終的に警察官に任命される。おとなしい子羊の副市長ベルヴェザーは連続失踪事件と肉食動物凶暴化事件の黒幕であった。この映画は、全てを反転させることで、我々が偏見によって物事を無意識に決めつけていることの誤りを啓発している。ジュディが知らないうちにニックやその他の肉食動物を偏見により傷付けてしまったように、我々も、生まれ育った環境で知らぬ間に構築されている偏見で誰かを差別してしまっている可能性があるのだ。

この映画は誰もが知らぬ間に持っている偏見で、差別をしかねないということを啓発すると同時に、多文化共生の社会に向けて、価値観も考え方も違う人々とうまく関係を築くためのアイデンティティ・ポリティクスとコミュニケーション・スタイルを教えてくれる。

(10516字 原稿用紙26.2枚相当)

⁹ 同前 p.17

【参考文献及び関連URL】

- ◆塩原良和（2014）「マイノリティとポジショナリティ」 大澤真幸・橋本努・和田伸一郎編『ナショナリズムとグローバリズム』 新曜社
- ◆加賀美常美代（2013）『多文化共生論』 明石書店
- ◆塩原良和（2012）『共に生きる』 弘文堂
- ◆スーザン・フランシス作 橘高弓枝訳（2016）『ズートピア』 偕成社
- ◆「COCA -English- Corpora」（2022）
<https://www.english-corpora.org/coca/>